

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 朴承賢

【所属】 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース博士課程

【研究題目】

1DK マイホームでの孤独と死

: 「東京桐ヶ丘都営団地」の建替えと地域介護をめぐる民族誌

【研究の目的】(400字程度)

本研究は東京都北区「桐ヶ丘都営団地」でのフィールドワークを通じて、1)住居福祉の後退、2)建替えによる建造環境の変化や移住、3)住民の高齢化という複合的な変化の中で、団地の「孤独死」で極端に現われる住民の「社会的な孤立」の問題を考察し、超高齢社会における「老いの経験」や「死の意味」を追究して、持続可能な地域コミュニティへの問いを論じることを目的とする。

本研究は、孤独死まで引き起こしている単身高齢者の社会的な孤立の問題に対して実践人類学の問題意識を共有し、「空間計画」において完全に排除されている高齢住民の観点を生かした現場知識を創出することを目指しており、新自由主義的な政策の中での「公営住宅の建替え」という急を要する問題を読み解く有用な研究方法を提示する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

桐ヶ丘団地の歴史は戦後、引揚者の臨時居住地「赤羽郷」から始まる。桐ヶ丘公営団地は1954年から1978年にかけて5,920世帯のマンモス団地として建てられた。一方、団地の老朽化で1995年からは建替えが行われており、現在は全体6期の中で4期の工事が進行中である。住民の定住志向に加え、政策的な問題が加わって、「若い夫婦と幼児の世界」であった桐ヶ丘団地は、高齢化率が50%を超える「超高齢社会」となっている。

戦後の建てられたばかりの桐ヶ丘団地は無味乾燥な外観によそ者たちが集まってきたにもかかわらず、活気に満ちたコミュニティをすぐに作り出し、地域自治の象徴的な空間としても記録された。しかし、60年以上経過した現在、住民の高齢化を同時に進んでいる建替えにより、団地コミュニティは沈没船のように沈んでいる。東京都の計画者たちは、建替えによる移住は大体に団地内の引越しなのでコミュニティにはあまり影響を及ぼないと語る。しかし、高齢住民たちにとっては玄関に出入りしながら、洗濯物を干しながら、立ち話するのが慣れた話し合いの方式であるため、建替えによる移住は近隣との日常的な相互作用を急激に萎縮させた。また、住民全員が加入させられ団地の環境管理や地域コミュニティの基盤となってきた長い歴史の自治会組織は大きく揺れてしまう。

コミュニティの衰退は住宅福祉の後退と密接な関連を持つ。格差拡大により公営住宅の需要は高くなっているが、公営住宅の供給は増えず、所得制限がより厳しくなっており、低所得層ではないが中間層ともいえない人々が公営住宅から排除されている。現在の公営住宅は「運がいい」労働者家族の「国民住宅」ではなく、相互尊重感を持ちにくい「失敗者」の住居地となりつつある。一方、収入超過世帯への立ち退き規定により賃金労働をする未婚の子供との同居率が低く、団地ジュニアにも格差の原因を提供すると同時に、高齢者だけの世帯を増加させる。家族構成を歪曲させる可能性を含め、新自由主義的な福祉政策がどのように最も脆弱な階層を分裂させ、孤立させるかの問題が桐ヶ丘団地の現場で表れている。

【結論・考察】(400字程度)

桐ヶ丘団地の建替え過程では全体世帯の40%が1DKと建設されている。1DKという一人暮らしむけの「シングル時代の間取り」は家族の解体を公然と表すだけではなく、後に誰かが介入する余地さえ遮断する。1DKとして象徴される「社会的孤立」は、団地の「孤独死」に極端に表れている。一方、研究者の建替えによる移住がもたらす社会的孤立の問題を明らかにする。「場所」は個人とコミュニティのアイデンティティの源泉であるという観点から、「居住」や「場所」についての議論を読み解く。空間に対する支配が日常生活、そして日常生活を超えて根本的な社会的権力の源泉であるという理論的な立場から、地域福祉と開発のジレンマの問題を考察する。

そばに誰もいない「1DKマイホーム」での孤独な死、すなわち悪臭で発見され「公共」が関与する死は、人類が経験したことのない死のあり様である。本研究では、プライバシー確保が最大の関心であった団地という空間への省察、地域コミュニティへの緊迫な要求を論じる。そこで、研究者は無縁化されている超高齢社会に求められる持続可能なコミュニティの在り方、個人主義と共同体主義が両立できる住居の在り方を再考する。